

本因坊秀哉（1874～1940）

明治7（1874）年6月24日東京の芝桜田町に生まれる。名は田村保寿、内務省勤務の父田村保永から囲碁を教えてもらった。11歳の時方円社に入塾、石井千治、杉岡栄次郎とともに方円社三小僧と呼ばれた。保寿は方円社と肌が合わなかったのか、すぐ脱退し、地方から上京する若者向けの事業を開こうとしたが、許可が下りず頓挫、千葉の東福寺で碁の相手や農業の手伝えをしていたが、翌年東京に戻り、金玉均の紹介で十九世本因坊秀栄門下に入門、四段を許され、1897年には五段に昇段した。秀栄は当時他の棋士達をことごとく先二以下に打込んでいたが、田村は唯一先を保ち、本因坊継承の最有力候補と見られていた。しかし秀栄は田村のことを嫌い、雁金準一の実力は田村に及ばないことを認めながら、雁金を後継者に望んでいた。秀栄が寝込む様になってから、田村は面会も許されなくなった。田村の性格は極めて我が強く、金銭にうるさい所があり、そういった所が江戸っ子は宵越しの金をもたぬ・・・気質の秀栄に嫌われた要因であろうとされている。本因坊門では田村派と雁金派に分かれ勢力争いが激しくなった。秀元が一旦、二十世本因坊について、一年後田村に本因坊を継がせることで事態を収拾した。田村は1908年、34歳で二十一世本因坊秀哉に就任した。その後1910年には井上因碩と十番碁、9局目で先二に打込むなど、すべての棋士達を先二以下に打込んだ。

大正初期には本因坊門、方円社等各派合同機運が生まれ、1923年1月には本因坊家と方円社が合同して中央棋院を設立するが、4月にふたたび分裂する。しかし、同年9月の関東大震災で各派は大きな打撃を受け、翌年各派や関西の棋士等が一緒になり日本棋院が設立された。囲碁界が一本化することを条件として、大倉喜七郎男爵が出資し、牧野伸顕が総裁、副総裁大倉喜七郎以下全て外部から役員は選出された。9月の関東大震災、皮肉にも、この大惨事がきっかけで、囲碁界はひとつにまとまることになる。大倉喜七郎男爵が囲碁界の一本化を条件に出資を承諾した。大正十三年七月十七日を創立記念日として日本棋院が誕生した。男爵は囲碁を文化としてとらえ、海外の進出も視野に入れた進歩的な考えの人であった。

秀哉は棋院最上位者として、定式手合（大手合）に出場。そして、1936年、日本棋院に本因坊の名跡を譲渡した。世襲制でなく選手権戦によって本因坊を決める本因坊戦が誕生した。秀哉は後継者として小岸壮二を考えていたが、小岸が夭折したため本因坊位の世襲制廃止に踏み切ったと思われる。終身制最後の名人、力戦型の碁風で従来への布石重視の風潮に転機をもたらした。

1938年、木谷実との引退碁を打ち、1940年1月18日、実力制初代本因坊の決定を見ることなく熱海の旅館で死去した。日本棋院葬が執り行われ、歴代本因坊が眠る本妙寺に葬られた。その後毎年1月18日は秀哉忌として、本因坊保持者や関係者による法要が行われている。

完